



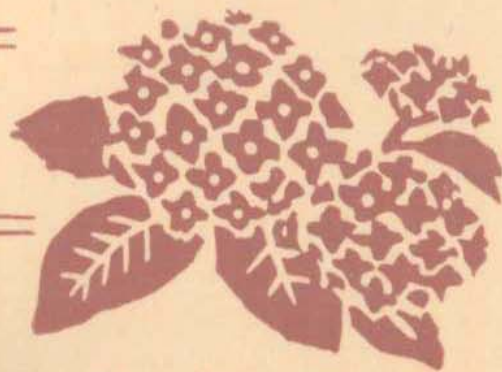
角川文庫

—1883—

旅 人

—ある物理学者の回想—

湯川秀樹



角川書店



昭和三十五年一月十五日 初版発行
昭和四十五年四月三十日 二十八版発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

庫 文 川 角
人 旅



著 者 湯 川 秀 樹

発 行 者 角 川 源 義

印 刷 者 中 内 佐 光
東京都千代田区飯田橋一ノ二

発 行 所

● 東京都千代田区富士見二ノ十三
● 一〇二 ● 東京一九五二〇八

株式会社 角 川 書 店
電話東京(265)三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

本製間・印刷曉

旅 人

—ある物理学者の回想—

湯 川 秀 樹



角 川 文 庫

1883

旅人

——ある物理学者の回想——

はじめに

昨年（昭和三十二年）の一月、私は満五十歳の誕生日を迎えた。つまりその日までに、私はちょうど半世紀を生きて来たことになる。

私の歩いて来た道は、普通の意味では別にけわしくはなかった。学者の家に生れ、後には、それぞれ違った方面の学者となった兄弟たちと、一しょに育ってゆく過程において、また自由主義的な色彩の濃い学校生活において、世俗的な苦勞は少なかった。環境的には、むしろ恵まれていたといった方がいいかもしれない。

しかし、「学問の道では」と聞かれると、簡単には答えられない。好運だったとも思えるが、人一倍、苦勞したことも否定出来ない。何しろ原子物理学といえ、二十世紀に入ってから急速に進歩した学問である。その上げ潮しほの中で、自分の好きなことを自分の好きな流儀で、やって来ただけだともいえよう。ただ、私は学者として生きている限り、見知らぬ土地の遍歴者であり、荒野の開拓者でありたいという希望は、昔も今も持っている。

一度開拓された土地が、しばらくは豊かな収穫をもたらすにしても、やがてまた見棄てられてしまうこともないではない。今日の真理が、明日否定されるかも知れない。それだからこそ、私

どもは、明日進むべき道をさがし出すために、時々、昨日まで歩いてきたあとを、ふり返って見ることも必要なのである。

上に述べた二つの道はしかし、実は重なっている。私が学究者として成長して来た道は、同時に、人間として歩いて来た道でもある。

二十年近くの間、私は随筆の形で、簡略にはあるが、自分の過去について何度か語った。そしてまた、私以外の多くの人の手によっても、私のことがいろいろと書かれて来た。私の評伝といったものも、五指に余る。世間は私という人間について、一応のイメージを作りあげてしまった。そのイメージが、どこまで正しいか。一つの判定資料を提供したいと思うのである。

ある人が、鏡に向って自分の顔を見る。それは他人が見たその人の顔でもある。ところが、自分が他人の目に見えない自分の本質について語る時、聞き手は意外な顔をするかもしれない。主観と客観の一致は、この場合むつかしいのである。ことに私は生れつき、自己を表現することに困難を感じる人間である。それにまた自意識過剰（かじょう）の人間でもある。自分を客観的に見ようと努めながら、自分でそれを裏切ることになるかもしれない。

とにかく、何が生れて来るか、私にもはっきりとは分らない。五十歳を迎えるところに、そこはかとなく芽生えた希望を、たまたま朝日新聞が満たしてくれることになった。以来一か年、私は余暇をさいて、準備をつづけた。そうこうする中に、五十一歳の誕生日も過ぎた。

私は私の近親の人たちに迷惑を及ぼさない限り、彼らのことも一しよに書くつもりである。学校の先生や友だちも登場するであろう。この回想の大部分は湯川秀樹（かみづき）自伝というよりは、小川秀

樹とその周辺ということになるだろう。「小川」は、私の生家の姓である。さて、小川秀樹は明治四十年（一九〇七年）当時の東京市麻布区市兵衛町に生れた。歳ごとに紅梅の美しくにおう家であった。

知恵の故郷

私の生れを京都だと思っている人が、今でも少なくないようである。

なるほど、私は五十年に余る歳月のうち、大部分を京都ですごして来た。

学校は小学校から大学まで京都。大学を出て、一時、大阪や阪神間にいたことはあるが、やがてまた京都に帰って来た。先年、アメリカからもどった時も、列車が東山のトンネルを抜けた時に漸く、

——ああ、帰って来た。

と、思ったものだ。

しかし、生れたのは疑いもなく、東京である。麻布市兵衛町二番地。この高台にあった家を、私は少しも記憶していない。そこに咲いた梅の花の美しさも、母から聞かされて、知っているだけである。しかし、私はいつしか、この梅の花をこよなく美しかったものと、思いこんでしまった。そしてそれは、自分の出生を自ら飾ろうとする無意識の働きでもあったろう。

私は麻布の家に、誕生後一年と二か月しか住んではない。当時、地質調査所の所員であった父、小川琢治が、京都帝大の教授となつて、一家をひきつれて赴任してしまつたからである。京大の文学部——当時の文科大学に初めて、地理学の講座が設けられた時のことである。

麻布の家の辺りは、戦災に遭^あって、今ではすっかり相貌^{そうぼう}を変えてしまった。

もとは、余り広くない坂道を登って行ったところ。その一面に、団琢磨^{だんたくま}氏の家があった。柳兼^{やなぎかね}子さんの家も、大きくて立派な家だったそうだ。

私は幼いころ、母にせがんで、生家の模様を聞きたがった。

母は、

「その家は、まだ大きな家ではありませんでした」という。

「でも、日当りのいい、住みよいお家でした。あなたの生れたのは大変に寒い日で……」

寒かったのは当然である。一月の二十三日である。梅のつぼみも、まだ固かったであろう。

長兄^{よしき}芳樹^{よしき}が数え年で六つ、次兄^{しげき}茂樹^{しげき}が四つだった。兄たちにも、この家の記憶は薄い。長兄の更に上に、香代子^{かよこ}と妙子^{たえこ}の二人の姉があった。この姉たちは、今でもその家を記憶しているという。が、五十年前の記憶などというものは、そんなに確かなものではないだろう。

京都へ引越し荷物を送り出してから、一家は新橋駅前の旅館に泊ったそうだ。

「夜、汽車の線路が遠くまで光っているんだ。その青い色を、いまでも覚えている」

と、兄茂樹は言うが、出発は三月末、まだいくらかはだ寒い夜であった。

明治四十一年といえ、白露戦後いくらか経^たたない時だ。日本人の気持はたかぶっていたであろう。が、新橋駅付近は、今から思えば想像も出来ないほど暗かったのではないか。古く、天井^{てんじやう}も低い旅館のランプのもとで、家族たちはそれぞれの胸に、新しい出発への期待や不安を抱いた

ことであろう。——いや、あるいはもう暗いタングステンの電灯くらいはあったかも知れぬ。
しかし、私の記憶は京都に移った後から始まる。やはり、京都が私の故郷ということになるの
かもしれない。

私の記憶の中で一番古いと思われるものは、母の背におぶさっている自分の姿である。

たしか、京都駅のプラットホームから、駅の本屋を結ぶブリッジ。その階段を、母は私を背負
って歩いていった。私は眠たくて、うつらうつらしていた。初めて京都についた時にしては、少し
記憶がはっきりとしすぎている。ブリッジの汚れた天井と、すすけたガラス窓も見えるが、多分、
もっと後のことになるだろう。汽笛の音や、汽関車の蒸気を吹く音も、鳴っているかのようだ。

もう一つ、同じような記憶。それは家の縁側でだれかの背におぶさっている場面だ。家族が多
いので、女中が何人もいたそうだから、女中の背中だったかもしれない。私の耳にきこえて来る
のは、ねむたい子守唄であった。私は、うつらうつらとしていた。庭には一面にけが生えてい
る。その上に薄い陽が射していた。庭の向うに、白壁の土蔵が明るい。どうも、これはもう少し
後に出てくる染殿町の家らしい。

京都に着いた一家に、まだ入るべき家があった。御所に近い柳風呂町の円覚寺、その一部を
借りる予定だったが、寺の方の準備が整っていなかったらしい。

一家は、三条蘇屋町上ル西側の、沢文旅館に一応旅装を解いた。

旅館では、広い一部屋を開放してくれたそうだが、なんと手ぜまな旅館ぐらしであ

る。母の気苦労は、大変だったらしい。

父は、新しい仕事の準備もしなければならぬ。机に向っている父の傍では、学齡前の男の子が二人、遊びまわる。兄弟げんかもしただろう。赤ん坊の私が時々、泣きわめいていたに違いない。

落ちつかない宿屋ぐらしの中で、思いがけない災難が降ってわいた。一夜、父琢治が、高熱に襲われたのである。

「腕が痛い」

と、最初、父はいった。

長い旅で、重い荷物を手にさげたりしたから、疲れたのではないかと母は思った。が、父の顔はたちまち熱を帯びてあからみ、

「痛みが普通ではない」

と言った。

右腕が、肩から手首まで、痛みを訴える。いくらかはれて来ているようだ。早速、京大病院に連絡すると、駆けつけた医師が蜂窩織炎ほうかしきえんと診断した。

父は翌日、入院した。

こちらが新任の教授であり、病院が大学の付属だったことが幸いした。全身麻酔まいすいをかけて手術。手当におちどはなかった。

一家はその間に、円覚寺に移った。病院の夫おつとと、大勢の子供たちをかかえて、母の心配はひと

通りではなかったろう。父も母も紀州の出だったが、京都には一軒の親戚もなかった。

父の体は、二か月ほどで回復したが、右ひじから手首にかけて、一生、傷あとを残した。

柳風呂町といえ、今でも静かな横丁だが、そのころは一層さびしい、町はずれであった。何しろ京都の人口が、三十万を漸く越えたという時代のことだ。京大が創設されて、まだ十二年しか経っていない。

この寺には、一年ぐらい住んでいたのだろうか。

私たちの家はその後、たびたび変った。家主の方の都合によることも、あったかもしれないが、大抵はこちらに理由があったのである。

そのころは父方の祖母と、母方の祖父母が同居していた。父が養子だったせいである。私のあとは、弟の環樹、滋樹が生れる。大家族である。その上に、父の蔵書が急速にふえてゆく。

大体、父は地質、地理の専門家であったが、趣味が非常に広く、多かった。専門外の雑書をいくらかでも買い集める。書画も好きだ。

そして、何かある問題に熱中すると、それに関するあらゆる文献を集めないと気がすまない。

たとえば、碁を打つようになると、囲碁に関する書物を手当り次第に買いあさる。書籍はたちまち書架にあふれ、書斎に満ち満ちてしまう。土蔵の中も、もちろんいっぱいだ。すると、

「また、ひっこしだな。どこかに大きな家はないか」

と、憮然として母に訴える。

そのころの大学教授というものは、今日より遙かに恵まれていたらしい。

父は毎日、自宅と学校の間を人力車で往復した。まだ、車にゴム輪のつかない時分で、走り去る車がからからと高く鳴りひびくのを、私はかすかに記憶している。

だが、このように大家族を抱え、次々と書籍や書画を買いこんでいたので、家計は必ずしも豊かではなかったようだ。男の子の全部を大学にやることは、父もためらったことがあるらしい。もし、母の強いすすめがなかったら、私も大学教育は受けずにしまうようなことに、なっていたかもしれない。すると今日の私は、存在しなかったことになっただろうか。

私は運命論者ではないが、このことを考えると不思議な思いに誘われる。人間はどんなきつかけから、どんな変り方をするか分らない。二十何年か後、私の頭にひらめいた着想が、物理学の進路をいくらかでも開いたとすれば、それはまた物理学の運命にも、多少のかかわりを持つことになる。

私たち一家は、寺町広小路上ル染殿町という所に移った。梨木神社の北である。お公家さんの住んでいた大きな家で、この家の庭にも、厚いこけがっぱいに生えていた。家主のお公家さんは、六条さんという人だった。私は見たこともないが、姉の話によると、顔の角張った、子供の目には怖ろしい人であったそうだ。

「つんぼ六条さん」とみんなが呼んでいた。

「つんぼ六条さん」という名は、どこから来たのだろう。

葵祭あおいまつりで勅使が参向する時、堂々たる衣装いしやうをつけて、馬上ゆたかに姿勢を正したこの人の姿を、姉はいまでもはつきり思い出すことが出来るという。

私は、この人がつんぼなのだと思っていた。が、最近、姉から聞いたところによると、別に肉体的に故障のある人ではなかったようだ。人と話をしていて、自分に都合つごうの悪いことが出て来ると、急にきこえない振りをしてしまう。だから近所の人には、一種皮肉な呼び名として「つんぼ六条さん」の名を呈したものらしい。

当時の京都には、お公家さんが多かった。格式は高く、ふところ具合はそれに伴わず、彼らの中には変屈な人も、かなり多かったのではないか。「つんぼ六条さん」などは、むしろユーモラスな存在だったかもしれない。

私たちの移り住んだ六条さんの持ち家は、寺町通りに面していた。

門の左、土塀どべいにさしかけるように床ふかの高い部屋があり、れんじの物見窓が開いていた。植込みの多い庭を通り、奥深く暗い玄関を入ると、古めかしく広い部屋がならんでいた。二階もあってこれは祖父母たちの部屋になった。

私は兄茂樹と一しょに、物見窓から通りをながめて遊んだ。

寺町通りはいまでもせまい通りだが、その道の一方によせて、小さな市内電車がせまいレールの上を走っていた。京都で、いや日本で、最も古い狭軌路線きょうきせうの一つである。

現在では、一筋東寄りの河原町通を市電が走り、寺町通はレールの跡形もないが、そのころの河原町通は、今の寺町よりも、もっと道幅がせまかった。

その電車通りの向う側は清浄華院^{しょうじょうけいいん}で、斜めに山門と向い合っていた。浄土宗^{じょうどしゅう}の本山だが、そのころの私たちは、何故かこの寺を「ジョウケン寺」と呼んだ。兄たちはよくこの寺の境内^{けんだい}を遊び場とした。

山門を入ると、左手に本堂があった。見上げる屋根の正面に、菊の紋がついていた。本堂から事務所や庫裡^{くら}につづく高い渡り廊下をくぐると、広い墓地があった。兄たちは、ここでかくれんぼをした。おにごっこもした。私も兄たちの後について遊んでいたらしい。しかし、このころのことは、ほとんど何も覚えていない。いや、一つだけ覚えている。――

長兄芳樹は、そのころから年よりは老成した性格であった。次兄茂樹は一見おおように見えだが、何かにつけて自信が強かったらしい。三番目の子供だった私は、すでに兄たちの圧迫を、おぼろ気ながら感じはじめていたらしい。

「ジョウケン寺」の墓地を駆け抜けながら、足をすべらせて倒れ、墓石にひどく頭をぶっつけたことがある。一瞬、目がくらむようであった。

「あッ！」

と言って思わず泣き出した。が、兄たちはすでに遠く走り去ってしまった。私は仰向け^{あおむけ}に倒れたまま、桜の葉の間から落ちる陽の光に、不意に目を奪われて声をのんだ。木洩日^{こもれび}が、こまかく分れて、無数の星のように見えたのである。真昼の星。

私が後年、中間子の着想を得た時、不思議にこの時の木洩日をはるかに思い出した。